主日礼拝説教「その一人を記念して」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年7月9日

【旧約聖書日課】エレミヤ書　38章1～13節

1マタンの子シェファトヤ、パシュフルの子ゲダルヤ、シェレムヤの子ユカル、
マルキヤの子パシュフルは、エレミヤがすべての民に次のように語っているのを
聞いた。
2「主はこう言われる。この都にとどまる者は、剣、飢饉、疫病で死ぬ。しか
し、出てカルデア軍に投降する者は生き残る。命だけは助かって生き残る。3主
はこう言われる。この都は必ずバビロンの王の軍隊の手に落ち、占領される。」
4役人たちは王に言った。
「どうか、この男を死刑にしてください。あのようなことを言いふらして、こ
の都に残った兵士と民衆の士気を挫いています。この民のために平和を願わず、
むしろ災いを望んでいるのです。」
5ゼデキヤ王は答えた。
「あの男のことはお前たちに任せる。王であっても、お前たちの意に反しては
何もできないのだから。」
6そこで、役人たちはエレミヤを捕らえ、監視の庭にある王子マルキヤの水溜
めへ綱でつり降ろした。水溜めには水がなく泥がたまっていたので、エレミヤは
泥の中に沈んだ。
7宮廷にいたクシュ人の宦官エベド・メレクは、エレミヤが水溜めに投げ込ま
れたことを聞いた。そのとき、王はベニヤミン門の広場に座していた。
8エベド・メレクは宮廷を出て王に訴えた。
9「王様、この人々は、預言者エレミヤにありとあらゆるひどいことをしてい
ます。彼を水溜めに投げ込みました。エレミヤはそこで飢えて死んでしまいます。
もう都にはパンがなくなりましたから。」
10王はクシュ人エベド・メレクに、「ここから三十人の者を連れて行き、預言
者エレミヤが死なないうちに、水溜めから引き上げるがよい」と命じた。11エベ
ド・メレクはその人々を連れて宮廷に帰り、倉庫の下から古着やぼろ切れを取っ
て来て、それを綱で水溜めの中のエレミヤにつり降ろした。12クシュ人エベド・
メレクはエレミヤに言った。「古着とぼろ切れを脇の下にはさんで、綱にあてが
いなさい。」エレミヤはそのとおりにした。13そこで、彼らはエレミヤを水溜め
から綱で引き上げた。そして、エレミヤは監視の庭に留めて置かれた。

【使徒書日課】使徒言行録　20章7～12節

7週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌
日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。8わたしたちが
集まっていた階上の部屋には、たくさんのともし火がついていた。9エウティコ
という青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく
眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死
んでいた。10パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。
「騒ぐな。まだ生きている。」11そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、
夜明けまで長い間話し続けてから出発した。12人々は生き返った青年を連れて帰
り、大いに慰められた。

【福音書日課】ルカによる福音書　7章11～17節

11それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の
群衆も一緒であった。12イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の
一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、
町の人が大勢そばに付き添っていた。13主はこの母親を見て、憐れに思い、「も
う泣かなくともよい」と言われた。14そして、近づいて棺に手を触れられると、
担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きな
さい」と言われた。15すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは
息子をその母親にお返しになった。16人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大
預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださっ
た」と言った。17イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に
広まった。

「まだ生きている！」【こども説教のために】

主イエスの弟子たちの教会が世界中に広がり始めたころのことです。弟子たちの教会に反対していた「サウロ」という名の若者がいました。サウロは、主イエスに従う者を見つけ出しては、連行し、裁判にかけようとしていました。ところがある日、突然、天からの光に照らされて、倒れ、目が見えなくなってしまうという経験をしたのです。そのサウロを助けてくれたのは、主イエスに従う弟子の一人、アナニアという人でした。アナニアは、彼を迎え入れ、彼の目が見えるようになるようにと祈ってくれたのです。サウロは、そのとき、主イエスと出会っていました。そのときから、サウロは、主イエスに従う弟子の一人になり、主イエスのことを伝える者になりました。ユダヤ人だけでなく世界中の人に主イエスのことを伝えるために、サウロは、ギリシア語の名「パウロ」を名乗って活動するようになったのです。

このパウロが、トロアスという港町に滞在し、日曜日の教会の礼拝に出ていたときのことです。パウロは名の知れた宣教師になっていましたから、教会の人々は、彼から話を聞くことにしました。その話は延々と夜中まで続きましたが、皆、熱心に耳を傾けたのです。それでも、中には眠気に襲われる者もあったのでしょう。一人の青年、エウティコは、眠気覚ましに窓際に行って夜風に当たろうとしていたのかもしれません。ところが、そこで眠りこけてしまい、三階から地面に落ちてしまったのです。駆け寄った人たちは、彼が死んでしまったと思いました。けれども、パウロは、彼の上に覆い被さり、抱きかかえて言いました、「**騒ぐな。まだ生きている**」と。パウロは、主イエスが死んだ若者を生き返らせてくださったことを聞いていたのでしょう。教会の人々は皆、パウロの言葉を聞いて、気づいたのです、「エウティコは、まだ生きている」と。そうです、彼らは、生きているエウティコを取り戻し、自分たちの教会の集まりに連れて帰ったのです。

若者の死

エウティコ青年の物語を聞くたびに、わたしは、自分自身の青年時代を思い出さないわけにはいきません。

たしかに、わたしは、いつも居眠りをしていたのです。言い訳をすれば、母教会は、長い説教をすることで有名な牧師だったのです。短くて 40 分、長ければ 1 時間以上、いつも説教は続きました。礼拝堂の最前列から座らされていた青年たちの中で、わたしは、率先して説教中に居眠りをする組でした。もちろん、説教後の祈りが始まれば、不思議と目が覚めるのです。

いいえ、わたしがエウティコ青年の物語を聞くたびに思い出すのは、そのような自分の姿ではありません。教会が大好きで、いつも教会にいた二人の青年のことを思い出すのです。二人の青年は、わたしが二十代の最初と最後に、ある日突然倒れ、そのまま病死したのです。二人の葬儀は、教会で執り行われました。どちらの葬儀も、教会内外から本当に大勢の人が参列していました。どちらの葬儀でも、友人たちの多くは、言葉も整わないまま死んだ青年の名を呼ぶばかりでした。

牧師になってから、若い自衛官の葬儀を執り行ったことがあります。本人は信者ではありませんでしたが、信者であるご母堂の願いで、キリスト教式で執り行ったのです。ご家族を除くと、参列者は皆、制服を着た自衛官ばかりでした。彼らは、自衛官らしく毅然と振舞っていましたが、深い嘆きに覆われ、互いに言葉を発することもほとんどありませんでした。

若者の死は、いつの時代にも、受け入れがたいものです。できれば身近では起こってほしくないと、だれもが思っていることでしょう。それでも、避けられないことがあるのも、事実です。

七夕の日に、母娘の二人で犬の散歩中に雷に打たれて亡くなった信者のご葬儀を執り行ったことがあります。ご夫君が名の知られた方であったこともあり、市営斎場で執り行われた葬儀には延べで 2000 人以上の方が参列されました。けれども、わたしが亡くなった二人のことで嘆かれる方々の言葉にならない思いをお聞かせいただいたのは、葬儀がすべて終わって、しばらく経ってからのことでした。

主イエスがナインという町に立ち寄られたとき、一人の若者が葬られようとしていました。ユダヤ人の習慣で、死んだ仲間の遺体を棺（あるいは担架）に乗せ、皆で担いで墓まで行列をしていたのです。その道すがら、死者を思って嘆き、惜別する者のために、行列は立ち止まりました。母親をはじめとして、人々の嘆きは深いものだったでしょう。けれども、主イエスは、「**泣くな**」と言われるのです。「**若者よ、あなたに言う。起きなさい**」と。彼らの間で、その若者は、起き上がり、母親のもとに取り戻されたというのです。

この一人を連れて…

「福音書」や「使徒言行録」には、主イエスのほかにも、死者が生き返ったという逸話がいくつも伝えられています。その多くは、こどもや若者の逸話です。それは、主イエスの眼差しが、しばしば、こどもや若者にこそ向けられていたからなのでしょう。幼いこどもを弟子たちの真ん中に立たせては、「わたしの名のためにこの子供を受け入れ」（ルカ 9:48）なさいと教えられ、こどもたちを遠ざけようとする弟子たちがあれば、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」（ルカ 18:16）とお叱りになられました。

こどもたち、そして若者たちを、どのように受け入れ、どのようにするのか。そこに、わたしたち一人ひとりの生き方が、また社会のあり方が、はっきりとあらわれてくるのです。だからこそ、主イエスは、こどもたちに、また若者たちに、眼差しを向けるよう、繰り返し教えられたのでしょう。

こどもたちの多くは、まだ何者でもありません。若者たちの多くも、まだ何も成し得ていない者たちでしょう。いいえ、本当のところ、わたしたちは、成人しても、社会的な地位を得ても、何かに成功しても、たとえ多くの収入を得るようになったとしても、実のところ、まだ何者でもないこどもと大差ない存在なのでしょう。まだ何も成し得ていない若者のように、わたしたちは、本当はいつも誰かの助けを必要としている者であることを知らなければならないのでしょう。

こどもたちには、大人が必要です。若者たちにも、彼らを本当に生かす人々が必要です。こどもたちは、思いのままに迷い出るかもしれません。若者たちは、大切なときに眠りこけ、危険な道を転げ落ちてしまうかもしれません。それは、わたしたち自身の姿であるかもしれません。

教会は、その一人ひとりに心を留めるのです。どの一人も、一人にしてはいけないからです。「人が独りでいるのはよくない」（創 2:18）のです。たとえ、「わたしは独りがよい」という者がいても、その一人を憶え続けるのです。それが「ただ乗り」だとしても、わたしたちの「犠牲」の上で成り立つ「独り」だとしても、教会は、その一人を憶え続けるのです。眠りから目覚めるまで、憶え続けるのです。たとえ一方通行でも、たとえ片思いでも、その一人は、死んだのではありません。「**まだ生きている**」のです。

いいえ、その一人が、たとえ地上での生涯を終えたとしても、わたしたちは、憶え続けるでしょう。記念し続けるでしょう。十字架で死なれた主イエスを記念し続けるように。復活された主イエスを記念し続けるように。

わたしたちの「エウティコ」を捜し出し、連れ帰りましょう。まだ生きています。彼に触れ、主イエスと共に、彼を起き上がらせるのです。